
レンタルパオパオ

源雪風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レンタルパオパオ

【Nコード】

N8138P

【作者名】

源雪風

【あらすじ】

象にお家をくつつけて旅をするよ。

一章は象さんとの出会い

第一パオパオ

これは、まあまあ不思議な国のお話。

まあまあ不思議な文化がある。

象に小さな家をくくりつけて、そこに住み、象を歩かせて旅をする。そんな人々を象乗り、象は尊敬の意を込めてパオパオさんと呼ばれる。

「暇だ！暇だあーっ！暇なんだびよーん！」

暇のあまり少しばかり頭が飛んでいる少女の名はいちご。

これから若さの勢いで、象乗りになっちまうんだよ。あーあ。

いちごの両親は放任主義すぎる為、娘の旅立ちに全く反対しなかった。むしろ、

「行ってこーい！もう二度と帰って来んでもええよーん」

などとティッシュのように軽いノリだ。

象乗りに対しては、国が文化保存の為に資金と食料をそこそこ援助してくれる。

と、いうわけでいちごは調子に乗って

「れっつごーとーうーねばーらんどっ！」

なあって叫んじまうわけさ。アディオス。

びよいびよいはねながら、いちごが向ったのはパオパオランド。

旅の相方になる象を借りる所だ。

盆地の中心に掘立小屋が一つあり、その周りで象どもがテキトーに暮らしてる。

しかし、パオパオさんはただのテキトーな象ではない。

とても頭が良くって、いや良すぎて人語が分かり話すことが出来る。

パオパオランドの長のみが、普通の象をパオパオさんにする力を持っている。すごいね。

さて、いちごちゃんはどうするだろう。

いちごはたくさんのパオパオさんに囲まれて、おろおろしてやがる。「どうしよっかな。どのパオパオさんにしよっかな・・・」
パオパオさんは、色々なバリエーシヨンの奴がいる。
ピンクでもふもふしてるプリティな子、たくましくて眼がキラキラしてる奴、鼻が長すぎて困っている奴、眼やにがすこいやつなどなど。

みな、パオパオランドでの平和すぎる生活に飽き飽きしており、全身から旅に出たいオーラを出していちごを囲む。

いちごはうるたえながらも、ちゃっかりしているので、それぞれの象を見て品定めする。

しかし、いまいちぴーんとくるパオパオさんがいない。

彼女の旅はここで終わっちゃうんですかね？

いや、断じて否。きつとよいパオパオさんを見つかるだろう。

見つけてくれないと困ります。まあ見守ってやるうじゃないか。

いちごはふと、一心不乱に穴を掘っているパオパオさんに気付いた。思わず駆け寄る。パオパオさんはじろりといちごを見て

「何だ貴様」と、渋い声で言う。

いちごはその瞬間、こいつは出来る象だと確信した。

これを人は運命と言ってしまふ。

「よし君、あたしと旅に行こ？」

象は穴を掘るのをやめ、いちごの方を向き、尋ねる。

「なぜ旅に出る？」

「なぜって・・・楽しそうだからだよ。穴掘りもいいけど、外にはもっと楽しいことあるよ」

象は口の端をにゅっと曲げて

「浅い。浅いが・・・悪くはない。ついていってやってもよい。だが、楽しませろよ」

と、うんざりしたふりをしてのたまった。素直じゃないんだからもうっ。

「貴様、名前は？」

「いちごだよ。君は？」

「名などとうに捨てた。貴様が好きに付けていい」

象は遠い目をして笑う。

「じゃあパオ様！」

「ふっ・・・悪くはない。小娘、早く行くぞ。日が暮れる」

偉そうだけど気分が乗ると、とことん張り切るパオ様であった。

第二パオパオ

パオ様に家をくくりつけ、いちこの旅はスタートしやがった。

「で、どこへ行く?」

パオ様は嬉しさをかみ殺して尋ねた。

「うーん、とりあえずあっち」

「ふむ。目的のない旅か。無謀とも言うがな」

しばらくたたらた歩いた時、パオ様に異変が生じてしまった。

「くっ・・・足がつった」

「えっ! だいじょうぶ?」

強気で屁理屈なパオ様が、涙を浮かべている。

それを見て、いちごはかわいそうに思った。

常人ならば「へっ、ざまあ!」とか言いそうなものを。

「僕も所詮、生身の肉体を持った俗物に過ぎんのか。ぐはあ」

「えっ! 一人称僕なの? 俺とか俺様だと思った」

「馬鹿! そんな一人称を使ったら・・・忌々しいサーカス団長とおそろいになる!」

急に過去をほのめかす熱弁をされて、いちごは後ずさりする。

「まあ、時が来たら話す。今は触れるな」

ハードボイルド風に締めくくられて、気になったけど聞けない。

「それよりも、僕はフルーツを所望する。足がつったらフルーツを食べて治すものだ」

いちごはパオ様をほんの少し、スプーン一杯分疑った。

もしかして、フルーツを食べたいから演技しているんじゃないかと。しかし、パオ様はなみだを浮かべ足を引きずっている。

パオ様は演技なんて小賢しい真似をするだろうか。

残念ながら、ちょっとやりそうだ。

とにかく、足のつりが本当であろうと無かろうと、パオ様にフルー

ツを与えることにするいちごであった。

さすが主人公。無駄に優しい。

ちやうどもう少し進めば、市場に着ける。

「じゃあパオ様。ムリしないでここで待ってて。今、フルーツ買ってくるから」

いちごはパオ様のまつ毛を一本取って市場に走った。

どうして毛を取るかって？

まつ毛もしくは象の足型は、象乗りにとってお金の代わりになる。

パオパオさんは、まつ毛のDNAと足形が政府の機関に登録されている。

店にそれを渡すと、受け取った店は政府へ品物代を請求し、受け取ることが出来る。

このシステムのせいで、裏金や偽足形など面倒が起こっているのはここだけの秘密でよろしく。

長々と説明している間に、パオ様はちよっくら物思いに耽っていた。盗み見してやろう。へっへっへ。

（いちごといったな。優しいな。今までの象乗りだったら「もう少し歩けこんちきしょう！」とか言っつて、僕を歩かせたのに。もしかしたら、本当に楽しい旅になるかもしれん。でも、

足がつっているのは本当だ。・・・む？僕は誰に向かって言っているのだ？まあいい。いつも穴を掘っているから、運動不足だ。正直もう疲れた。しかし、フルーツを買ってもらった手前「もう疲れました」。休みまあ「す」なんて言えぬ。そうだ！食べるためと称して、立ち止まって食べよう。うむ。よい考えだ。しかし待てよ。いちごは優しいようだから、少し休憩を挟んでくれるやもしれんなあんでぐだぐだ考えてるうちに、駆け足でいちごが戻ってきた。

「お待たせー！」

いちごはフルーツの盛り合わせを、パオ様に捧げた。

（ナ、ナイスだいちご！小娘と言って悪かった。三ミリ見直したぞ）

「あ、ありがと、な」

パオ様がフルーツを食べようとしたその時！

住民A「ちよつとあんだ。道の真ん中で邪魔よ。すみっこに行きなさい」

パオ様が振り返ると、ちよつとした渋滞になっていた。

「すみません」

パオ様といちごは、世界から忘れられたような片隅に移動した。

すっかり心が折れてしまったので、少し片隅で休む。

フルーツは、そんな二人を励ますかのように、ただただ甘い。

「怒られちゃったね」

「ああ、怒られた」

黙っていても仕方がないので、言葉のキャッチボールに勤しむ。

「足、だいじょうぶ？歩けそう？」

「もうしばらくすれば」

青い空と人の流れをぼんやり眺めた。

「行くか」

「そうしょっか」

てな感じで、微妙な空気から旅が再会するんだなあ。これが。

市場を抜けて行こうと思ったけど、住民たちが先ほどの渋滞でいらして、こっちを殺意のこもった眼で見ってくる。

仕方なく裏通りに行くことにする。

裏通りでは、子供たちが鉄砲玉のようにはしゃぎ回っている。

パオ様を見るなり、俊足で集まってくる。びっくり。

質問攻めしたり、べたべた触ったり、登ったり子供はフリーダムすぎる。

すぐろくで言うところ一回休みばかり引いてしまい、二人はへろりんちよとなる。

「まあ、これが旅、だよな」

いちごがパオ様の方を見ると、案外楽しそうにしている。

こやつ、子供好きか？口調まで変わっている。

「わーい。僕パオ様だよー。みんな僕と遊ぼー！」

声まで明るくなっている。でも、眼は虚ろだ。作り物のパオ様降臨
つてところかな。

いちごは、パオ様の狂いようを見て、ぽかーんとする。

（さつき、サーカスって言ってたけど、もしかしてサーカスにいた
のかな？）と思うけど、パオ様の虚ろな眼を見ると、言うてはなら
ん気がして保留する。

子供たちが嵐のように去った後、パオ様がその場にへたりこんだ。

「うぐぐ・・・もう歩けない」

「打たれよわっ！」

偉そうなくせして、へっぽこの極みなパオ様。

そんな二人をからかうように、雨が少し降ってきた。

パオ様がへたれているため、近くにあった大きな柳の木の下へ避難
する。

「もしかして僕は、相当ダメ象なのではないか」

強気な象ほど、思いもよらぬ逆境に激弱だったりする。

「しっかり。まだ旅は五時間しかしてないよ」

いちごはパオ様の頭を撫でる。

しかもポケットから何か取りだしたぞ！

「これ食べて頑張って」

小さく可愛らしいりんごだよ！あげるのもつたいない。

「いいのか？」

りんごを持ってうなずくいちごちゃん。

パオ様は鼻でちまっと掴んで、大切そうに口へ運ぶ。

「う、うまい」

「でしょ？さつきの子たちにもらったの」

「よし！もう少し歩く。乗れー！」

しかし、パオ様の決心もむなしく、雨はどんどんひどくなる。
時間もどんどん過ぎていく。

「今日はここで野宿しよう？」

「・・・そうだな。この雨じゃ象の僕とて流される」

かくして旅の一日目は終劇。ま、こんなもんっしょ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8138p/>

レンタルパオパオ

2011年1月3日20時59分発行